D.H.ロレンスの『死んだ男』について

田　中　雅　史

A Study of D.H.Lawrence's *The Man Who Died*

Masashi TANAKA

Abstract

The Man Who Died[1] is a novella which shows D.H.Lawrence's characteristics very well. In this essay I have divided it into several parts, pulled out phrases which seem important from each part, and examined them closely. The parts are as follows:

1) The Cock…The story begins with an episode of a young cock. Though tethered to a farmer's hut, it is full of vigor.
2) Revival…The man who died (Jesus Christ) revives in a cave and gets into the living world again. His agony contrasts with the beauty and freshness of surrounding nature
3) A Farmer's House…The man's impressions of a farmer, his wife, and the fresh nature are described. He regards the cock as an expression of the power of nature.
4) Conversation With His Former Disciple…He feels the difference of him from one of his former disciple.
5) A Farmer's House Again…He feels alienated among the people around him, the farmer and his wife and his former disciples and his mather and so on.
6) Into the Phenomenal World…The man's view of human societies and his decision of parting from them and of getting into the phenomenal world are told.

1) テキストはThe Phoenix Edition of D.H.Lawrence vol.15 (London: Heinemann, 1956) を使用した。引用は全てこの版からのものである。

7) Around the Temple of Isis…The man meets a woman who serves Isis, an Egyptian goddes. A slave boy performs a kind of sacrificial ritual with a slave girl, which the woman of Isis and the man who died incidentally witness. The description of this episode presents a deliberately interwoven network of symbols that shows the power of life in nature.
8) The Woman of Isis…The woman's life is told here. She is compared to a lotus.
9) The Woman of Isis and the Man Who Died…They understand each other.
10) The Woman's Mother…Her mother is a grave woman who reigns over vigorous slaves.
11) The Ritual of Rebirth…At night in her shrine, the woman performs a kind of ritual in which she rubs ointment on the man's wounds. By her touch, he is healed of his agony. This process is deliberatly described to show the connection between nature and human activities.
12) Departure…As the season changes from spring to autumn, their relation reaches maturity. The man knows her mother's conspiracy against him, so he decides to depart from the place.

In this story the human desire is regarded as a part of the cycle of the universe. The network of symbols spreads all over the story to show this connection. This view may be influenced by the Hermetic world view, in which the God is hermaphrodite, the world his womb.

Similar network of symbols can be found in Lawrence's other fictions. A lot of studies on him deal with it, too.

The story is also focused on obstacles to the true relations of nature and human societies: that is, egocentric tendencies in human relationship. Gilles Deleuze says in his essay on Lawrence that egos are only reflections of the relations. The man who died rejects the phantasm of egos and gropes for a new mode of living.

一 『死んだ男』の分析

『死んだ男』(*The Man Who Died*) はD.H.ロレンスの最後の時期の中編である。彼の特徴が集中してあらわれているこの作品をテクスト自体に即して、時代や作者などにかかわる情報は最小限に押さえて細かく分析し、それによって得られた結果をいろいろな角度から考えてみたい。まず、全体をいくつかの

部分にわけ（作品に既にあるのは第１部と第２部という分け方だけである。それ以外は筆者による分け方である。)、それぞれの中で重要と思われる表現を取り出して検討してみる。

第　1　部

1　鶏

物語は、まず男ではなく、エルサレムの近くの農夫が手に入れた鶏のエピソードから始まる。このことはロレンスの意図をよく示している。鶏（シャモ）は、春の訪れとともに雄々しい羽毛をつけ、若葉のころには曲がった首のまわりのオレンジ色が輝きを増す。これは、この鶏が自然界の生命を生み出す春の力とつながっているという意味であろう。そして、この鶏は周囲の雄鶏の鬨の声にこたえて、独特の燃えるような感じのこもった鳴き声をあげる。あるいは、３羽の雌鶏と仲よくなっている。これは、やはり自然界の生命の力の現れである雄同士の、あるいは雄と雌のかかわりである。それは自然界の中に埋め込まれている鶏にとっては、生物学的な事実以上の、何か神秘的な意味をもつものであり、かなたの雄鶏の挑戦の声は、「地獄の辺土から神秘的に彼に叫びかける亡霊の声」(Ghostvoices, crowing at him mysteriously out of limbo) と表現されている。

鶏は、逃げられないように縛られた身である。その束縛を、彼は仲間の鶏とのかかわりの場合同様、「ぼんやりとした予感するような」(gloomy, foreboding kind of) 理解の仕方によって知っている。それでも、「彼の中の生命はしぶとく生き残っており」(the life in him was grimly unbroken)、自然の力が満ち溢れる明け方の光とともに、「突然沸き起こる力」(a sudden wave of strength) をからだの中に感じた鶏は飛び立って紐を切り、「荒々しい異様な叫び」(a wild, strange squawk) をあげる。明け方の光も「突然沸き起こる力」も「荒々しい異様な叫び」も、いずれも自然界の生命の力の現れである。後で書かれているように、鶏自体がそうである。

2　復　活

続いて、キリストをモデルにした一人の男が、死からよみがえったというエピソードが語られる。洞穴でめざめた彼は、「痺れて、冷えきって、硬直し、きずだらけで、縛られて」(numb, and cold, and rigid, and full of hurt, and tied up) いた。冷たい布が顔に巻かれ、足は縛られ、「深い深い吐き気」(A deep, deep

nausea）を感じていた。こうした状況は、内部に生命力がみなぎっている１の鶏の場合と反対である。

彼はしばらくの間、「この世の外にいるという完全な冷たい無の状態」（the utter cold nullity of being outside）に身をゆだねる。やがて、ついに目を開いた彼は、闇にとりまかれており、どこかに「光の漏れてくる裂け目」（chinks of light）がある。これは生の世界へ通じるものだが、外に出た彼が感じるのは「孤独」（alone）「言葉にならないほどの幻滅からくる不快感」（the sickness of unspeakable disillusion）である。かれはエルサレムとは反対へ向かう。このことは、彼が他人の救済という以前の使命とは別の道に進むという後の展開とつながるものであろう。周囲にはオリーブやアネモネなどの「緑で息づいている自然界」（the natural world, thronging with greenness）がある。つまり、よみがえったものの依然として死の領域にある男と、生命に満ちた自然とが対比されている。

男は、この世のものでもあの世のものでもないと書かれている。「幻滅の深い吐き気」（deep nausea of disillusion）と「彼自身気づいてさえいない決意」（a resolution of which he was not even aware）をもって歩いていく男は、周囲の生命的な自然とは異質な存在である。その男の前に、例の鶏が現れる。鶏の叫びを聞いた男は「電気に打たれたように」（as if electricity had touched him）衝撃を受ける。そして、後を追ってきた農夫に頼まれて、逃げた鶏をとらえようと「経帷子の大きな白い翼」（his great white wings of a shroud）を開く。１でみたように、この話の中では鳥の羽ばたきは、内部の生命の力による隷属状態からの脱出を意味すると考えられるので、ここで男の経帷子が羽根にたとえられているのは、死の領域にとらえられていた男に変化が生じたとみることができる。

とはいえ、依然男は農夫を恐れさせる死人（白い顔色で、傷痕がある）である。オリーブ畑を抜けていく彼が足の裏に感じる小麦の感触は、「ザラザラした独自の生命の感触」（the roughishness of its separate life）である。深紅のアネモネのつぼみも同様に生命の力にあふれている。周囲の世界との距離が、ここでは強調されている。

3　農夫の家

次に男は自分が死によって分離された人間の世界に再び近づく。死を通じて、男は以前とは全く違った印象を、周囲の自然界にも人間たちにもいだくようになったことが語られる。

男は鶏の持ち主の農夫に招かれて彼の家に行く。食事を出されると、パンとわずかな水だけを食べる。欲望が死に絶えているので、食欲もないのだ。農夫とその妻は男の様子に恐怖を感じ、男は彼らの様子を「動作の点でも勇気の点でもいいところがない」(without any splendour of gesture and of courage)「避けがたく存在する退屈な自然界の一部」(slow, inevitable parts of the natural world) だと感じる。

男は「朝の日光の中で」(in the morning sun) 横になり、無花果の緑の新芽が「炎のようにほとばしっている」(spurting like flame) のを見る。春という時期の自然の生命の力が形をとったかのような無花果の新芽である。「朝の日光」も男に生命をよみがえらせる力をもつものである。しかし、男はまだこれらに反応できない。鶏も再びつながれて、庭の片隅で縮こまっている。ここでの鶏は、男の生命力がいまだ回復していない状態と呼応している。

依然として農夫たちとの間に距離を感じている男は、それでも自然の力を感じ取ることはできる。まわりには「ガラスのように明るい」(bright as glass) 世界が燦然と輝いている。夜が明けると彼は庭に出る。太陽だけが彼をひきつけるのである。「朝の冷たい空気」(the cool air of the morning)「頭上の青白い空」(the pale sky overhead) などを感じたいと思う。男が庭に出ていくと鶏の鳴き声がする。鶏の声は、追い詰められたような響きをもってはいたが、あきらかに「生からの死への挑戦」(challenge from life to death) であった。ここでも、鶏の態度は男と呼応している。ただし、男がまだ受動的であるのに対し、鶏は内部の生命の力によって死の世界に挑戦している点で、男に先んじている。

男はそのような鶏の中に、自然の力の現れを見る。

死んだ男は、生命をむきだしの形で眺め、広大な意志力がいたるところで荒々しい、あるいは微妙な波頭となって荒れ狂うのを見た。泡立ちが青い不可視のものの中から生じている。黒とオレンジの雄鶏や無花果の木の先端から出る緑の炎の舌がそれである。これら春の生き物たちは、欲望と自己主張に輝いて現れる。それらは不可視の欲望の青い洪水から、力の不可視の海から現れる泡の頂上である。

(The man who died looked nakedly on life, and saw a vast resoluteness everywhere flinging itself up in stormy or subtle wave-crests, foamtips emerging out of the blue invisible, a black and orange cock or the green flame-tongues out of the extremes of the fig tree. They came forth, these

things and creatures of spring, glowing with desire and with assertion. They came like crests of foam, out of the blue flood of the invisible desire, out of the vast invisible sea of strength, ...)

鳥も新芽もその他もろもろの春の生き物たちの営みも、「海」や「炎」といったような不定形のものにたとえられる自然の力が沸き立ってできる「泡」のようなものだと彼は感じている。これらは死に絶えることがない。その点で死んだ男とはっきりした対照をなしている。

次にこの鶏と農夫の飼っている雌鶏との関係が書かれている。雄鶏は食べ物を見つけると、自分より先に雌鶏に食べさせる。紐でつながれているという記憶は、夕暮れには「体内の生命の潮」(the tide of life in him) によって押し流され、お気に入りの雌が近寄って誘うと、「全ての羽をふるわせながら」(with all his feathers vibrating) 飛びかかっていく。ここで雌は「なにげなく」(unconcernedly) 近寄ると書かれている。つまり、この雌は自分のやっていることをはっきり自覚しているわけではなく、なにかに駆り立てられるようにしてそれを行うということである。雄鶏も同じである。それを見ている男も、そのことを理解している。

彼の見たものはその鳥ではなかった。生命のうねる海の波のなかで、少しの間別の波頭と重なり合う一つの生命の波頭であった。

.... and it was not the bird he saw, but one wave-tip of life overlapping for a minute another, in the tide of the swaying ocean of life.

これは「生命の荒れ狂う運命」(the raging destiny of life) であり、死よりも強いのではないかと彼は感じる。

4 女弟子との対話

墓がからになったことを知り、かなしむ女弟子との対話が次にある。男は農夫の家を出る前に、こうした人々を高めようと干渉したことが間違いだったと考える。干渉、救済は権力をおよぼそうとすることであり、鶏に現れているような生命の力とは別のものである。かつての女弟子マドレインは彼の復活を喜ぶが、彼女は再び彼を救済の仕事に引き入れようとする意図をもつものでもあった。ひざまずいてキスをしようとする彼女に対し、男は「自分はまだ傷が治っておらず、人と触れ合うことはできない」(I am not yet healed and in touch

with men）と言う。男に救済者として彼女たちのところへ帰ってきてほしい、勝利をあきらめるのかとマドレインはいうが、男は「自分が使命を越えて生き延び、それについてもはや知らない」（I have outlived my mission and know no more of it）ことが自分の勝利だと言う。

この男は、よみがえったときからひどい幻滅感、嘔吐感をもっていた。このエピソードはそれが人間社会に対するものであることを示している。マドレインは男のために何かしたいという気持ちにかられている。受け取ることなしに与えたいと望んでいる。しかしそれは周囲の自然界に見られるような純粋な生命の高揚からでたものではなく、相手に支配を及ぼそうとする無自覚の意図からでたものである。死んで人間の世界との絆を断ち切ることで、男はそれがわかり、また、かつての自分の救済者としての活動も同じであったと悟ったのである。「使命についてもはや知らない」ことが勝利だというのはそのためである。

彼は「大きな幻滅」（the vast disillusion）「背後の無関心」（the underlying indifference）とともに彼女を見るが、まだ迷いがあり、彼女の家に泊めてくれないかと頼む。すると、マドレインの言葉に「奇妙な勝利感」（peculiar triumph）、目に「勝利のひらめき」（the flicker of triumph）が宿る。それで、彼は去るのだが、女は失望を押し殺し、「師はよみがえり、死んではいない」（the Master was risen and was not dead）と考えて恍惚となる。

5　ふたたび農夫の家

彼は再び農夫の家に戻る。農夫の妻が彼に食事を用意している。男が彼女の肉体を求めてくることを彼女が望んでいる、と男は感じる。男は「柔らかい、かがんでいる、ちっぽけな肉体に優しい気持ちになる」（he felt gently towards her soft, crouching, humble body）が、「彼女の考え、意識」（her thoughts, her consciousness）がそれ以上進むことを妨げる。それは「固く、目先のことしか見えず、何でもつかみ取ろうとする」（hard, and shortsighted, and grasping）ものである。ここでも問題は、自然の生命の力の発露を妨げる人間の狭小な自我である。マドレインの場合は、それは相手に無条件に与えることで満足を感じるというかたちをとった。農夫の妻の場合は、肉体の関係において相手から何かを奪い取ろうとするという態度となってあらわれている。また、かつての男の場合には、人間を救済しようと干渉するというかたち、肉体的には欲望にしりごみをする童貞であるというかたちであった。彼は自分が生き返ったのは「肉体のより大きな生命を知っていて、与えるにも受け取るにもがつがつ

していない、そして彼が自分の肉体を混ぜあわすことのできる女、あるいは女達」(the woman, or women, who knew the greater life of the body, not greedy to give, not greedy to take, and with whom he could mingle his body) を見つけるためであると知る。

帰ってきた農夫が男に手をかそうとすると、男は「私はまだ父なる神にあげられていない」(I am not yet risen to the Father) といって、ことわる。農夫も「あとでもっと多くの褒美の金が得られるという望み」(the hope of greater rewards in money later on) にとらわれている人間であり、そのような人間の結びつきを男は拒んでいるのだと考えられる。それと対照的に、鶏に対して男は「お前はもう父のもとにあげられている」(thou art risen to the Father) と言う。それは、紐でつながれてはいても、太陽に明々と照らされている鶏は「生命の炎が鋭い一点となって燃え上がった」(the flame of life burned up to a sharp point) ものだからである。

かれはふたたびマドレインと、別の女弟子と、そして母親の三人に会ったときも、自分は父のところまで高められなければならないと言って、彼らと別れる。続いて「使命や福音は私から去ってしまった。」(mission or gospel is gone from me) と言っていることからも、これはキリスト教の神のところへ行くという意味ではない。ここでの父のところにのぼるとは、つまり鶏のように自然の力を内部に宿してそれにしたがって生きる境地に達するということであると考えられる。

かれは孤独が最上のものであると考える。「太陽と春の微妙な癒す力と」(The sun and the subtle salve of spring) が傷をいやし、「はらわたを貫いてぽっかりと開いている 幻滅の傷口」(the gaping wound of disillusion through his bowels) もなおりつつある。そして、「男たち女たちに対する彼の必要、彼らを所有し彼らによって救われることへのかれの熱望」(his need of men and women, his fever to have them and to be saved by them) も消えつつある。このような自我の専制の下にあるということが、つまり死んでいることである。彼を襲った現実の死は、その当然の帰結である。だが、死ぬことによって男は、人間を駆り立てる「ユスリカのような言葉」(words like midges) に刺されることのない「空気の澄んだ」(the air is clear) 世界をくぐり抜けたという。生き返った男は、人間を自我の専制につなぎ止める言葉から離れて孤独を保ち、自然の力を周囲に感じて、そこから回復する力を得ているが、まだ新しい生活に踏み込んではいない。

男は「さてこれから私は現象世界の流動のなかを歩いていこう。なぜなら私

を純粋に孤独にしておいてくれるのは、すべてのものがお互いの間に生じさせる流動状態の中であるからだ。」(Now I will wander among the stirring of the phenomenal world, for it is the stirring of all things among themselves which leaves me purely alone.) と考える。「すべてのものがお互いの間に生じさせる流動状態」は自然の生命の力の現れである。現実の世界とはそのようなもので、かつて自分が生きていたような干渉したりされたりする生活ではない。男は人々をいやす医師になろうと決めるが、それは「彼自身の孤独を完成させる」(to be fulfilled in his own loneliness) ためである。農夫に「私が人々のところに帰るときがきた」(the time is come for me to return to men) と言い、鶏をゆずりうけて彼は出ていく。

彼の孤独は、いまや鶏に現れているような自然界の生命の力とともにある。彼が出ていく世界は「雄鶏たちの肉体のうごめき」(the stirring of the body of cocks) でもあるような世界である。つまり、大洋の波のように自然の生命がうねり、ぶつかりあう世界である。一方、農夫とその妻は、彼からもらった金貨を数え始める。つまり、彼らは自分たちの小さな考えにとらわれ続けるのである。

6　現象の世界へ一人出て行く

第1部の終わりに、それまでの絆を離れた男の目に映る世界の様子と彼自身の立場の自覚が書かれている。

歩いて行く男の目に、荷を運ぶロバの一団が映る。重い荷を担うロバは、使命を担うかつての彼の姿を意味していると考えられる。周囲の世界に溢れている生命の様子は、さらにはっきり感じられるようになる。それは「さまざまに泡立つ」(bubbles variously) ものである。かつての彼は、それが「すべて同じように泡立つ」(to bubble all alike) ことを望み、説教をした。そのため彼は処刑されたのである。だが、彼は生き返り、孤独の中で「大地を受け継ぐ」(inherit the earth) すべを学んだ。

鶏は生命に熱くなっており、男は彼を「現象の沸騰」(the seethe of phenomena) のなかに投げ入れようと思う。「彼は自分の波に乗らねばならない。」(he must ride his wave) という言い方をしているが、波とは自然の生命の力を海にたとえたときのその分岐したものである。男も鶏も、それぞれ別の波として生きる必要があるのである。

男の鶏は、その晩泊まった宿屋の鶏と、翌朝ケンカをして勝つ。男は鶏の孤独が、そこにいる「雌鳥たちの誘惑によって磨かれて、輝く」(take on splendour,

polished by the lure of thy hens）と考え、彼をそこにおいていく。

男が進んでいく現象の世界は、「もつれあいと誘惑の広大な複合」（a vast complexity of entanglements and allurements）であり、男は「最後の問い」（a last question）を発する。「『一体、何から、何を目指して、この無限の渦巻きを救うことができるのか？』」（"From what, and to what, could this infinite whirl be saved?"）これは反語疑問に近い。生の無限の渦巻きは、どこから始まりどこへ向かうというものではない。

彼はこの問を発した後、孤独のまま彼自身の道を進んでいく。第1部の最後の段落でこれまでの男の考えがまとめられている。それによると、人間社会は「どこでも情熱と環境と強制との奇妙な絡み合い」（the strange entanglement of passions and circumstance and compulsion everywhere）、とくに強制であり、それは「気違いじみた自我の主張」（a mad assertion of the ego）である。その原因は、男も女も「自分が無ではないかというエゴイスティックな恐れ」（the egoistic fear of their own nothingness）にとらわれて、それを打ち消すために他人に強制を及ぼすということである。それが「都市、社会、そして客をもてなす主人の狂熱」（the mania of cities and societies and hosts）である。それは「彼に内在する孤立」（his intrinsic solitude）を侵害する。彼は自分がかつて、「すべての人に愛を強制する」（lay the compulsion of love on all men）というかたちでそれに加わっていたことを思い出し、吐き気がよみがえる。傷の痛みも新たになる。つまり、十字架にかけられてできた彼の傷が意味するのは、強制による以外他人と接触を持たなかった記憶である。現在では男は、それに痛みを感じるようになったのである。

第 2 部

7 レバノンの神殿の周囲

新たな舞台はレバノンである。そこでは、レバノンの山の雪から吹いてくる冷たく強い風、遺蹟に照りつける冬の太陽、松のざわめく音と交じる海の音などが自然の力を感じさせる。そこにはイシスに仕える女がいる。彼女のまわりには「風に吹かれて水しぶきをあげるように銀色になる」（silvered under the wind like water splashing）山腹のオリーブの林がある。これも生命にあふれた自然物である。彼女は松や樫の間をとおって太陽に向かっていく。つまり、生命にあふれた植物の中で、生命の源である太陽に向かっているのである。彼女は第1部の鶏のような存在である。

女が辿り着くのは海岸で、そこから神殿まではすぐのところである。海は深い青で、「陸地から遠くまで達しており、白い波頭がたっていた。」(running away from the land, and crested with white) 第1部では海は比喩だったが、ここでは実物の海である。

彼女の目の前では、一種の生け贄の儀式のようなものが行われている。奴隷の少年と少女が、夕食に使うハトの首を切り、血を海に注意深く落としている。イシスに仕える女は、半島に生えた松の横に立って、これを見ている。彼女は「冬の水仙のように」(like a winter narcissus) 孤独だと書かれており、半島も孤独を意味するものであろう。松は自然の生命の力を表す。彼女の立つ位置からはイシスの神殿が見える。このように、ハトの生け贄の行為とそれを見る女の情景は注意深く構成された一連の象徴からなっている。一羽のハトは逃げることに成功する。飛び立つハトは「低く暗い海のむこうから逃れてきた亡霊のように」(like a ghost escaped over the low dark sea) 飛ぶ。これは第1部のはじめで、挑戦するどこかの雄鶏の声が「地獄の辺土から神秘的に彼に叫びかける亡霊の声」と書かれていたのと呼応している。ともに、どこか分からない場所から突発的に起こる自然の力を表している。ハトは松の木の上を「渦を巻いて飛び去る。」(wheeled away)松も渦も自然の生命の力を表すと考えられる。これに続いて、少年がハトを逃がしたことで「怒りの発作」(an access of rage) を起こし、少女を殴る場面が描かれる。ハトが渦を巻いて飛び去る動きと、少年の心に動物的な怒りの感情が浮かび上がる動きは、意識的に並べられている。少年のこぶしにはハトの血が付いている。これは少年の感情が、ハトの生け贄の行為につながるような、心の原始的な層から湧き起こったものだということであろう。

女の近くで、第1部の死んだ男もこの情景を見ている。両者とも孤独で、人間の絆を離れて生きる人物である。この部分で①血を流すハト、②ハトを生け贄にしようとし、失敗して本能的感情の激発のままに片方は殴り片方は殴られ、さらに続いて本能的に肉体関係を持つ少年と少女、③それを見ている女と死んだ男、この三者は重なりあうものとして描かれていると思う。

とは言え、区別はある。女は奴隷たちに嫌悪を感じる。

8　イシスの巫女

女は自分の金でイシスの神殿を建て、7年間守ってきた。イシスといっても、ホロスの母としてでなく、夫と別れ、彼をさがすものとしてのイシスだという。

イシスはオシリスの妻で、八つ裂きにされた彼の体を集めて葬った。文中に

「死んでばらまかれた、死んで引き裂かれ、広い世界にバラバラに投げ捨てられた」(dead and scattered asunder, dead, torn apart, and thrown in fragments over wide world) オシリスとあるが、この状況は死んだ男と似通っている。イシスはバラバラになったオシリスを集め、「再びあたたかみが戻り、生き返り、彼女をだきしめ、受胎させることができるようになるまで、つなげた体をだきしめた」(fold her arms round the re-assembled body till it became warm again, and roused to life, and could emblace her, and could fecondate her womb) という。つまりイシスの巫女は、死んだ男の死んだ欲望に対して同様のことを行うという伏線になっている。

女自身はハスの花にたとえられている。ハスは「太陽の輝く熱には全然反応を示さない。」(will not answer to all the bright heat of the sun) 夜になって「殺されてもはや輝かない珍しい不可視の太陽の一つが、星々の間に目に見えない紫色をして昇って、スミレのように珍しい紫の光を夜の闇に放射する」(one of these rare, invisible suns that have been killed and shine no more, rises amang the stars in unseen purple, and like the violet, sends its rare purple rays out into the night) と、それに反応するという。

死んだ男は神殿に泊まりたいと頼む。彼は「暗い、幅広の帽子」(a dark, broad hat) をかぶり、「暗い顔」(dark-faced) で、「黒いとがったあごひげ」(with a black pointed beard) をはやしている。女は黄色い服を着て、「ピンクと白に塗られた柱」(a pink-and-white painted pillar) のそばにたち、顔はいくぶん細長く、青ざめている。この組み合わせは、上の殺された夜の太陽とハスの花に対応している。このことは男が神殿を「海岸にたつ青白い花のよう」(like a pale flower on the coast) だと言い、そこで休みたいと言っていることからも確認できる。

イシスの巫女は、洞窟に泊まった男の様子を見にくる。奴隷が男の手足の傷を見て、悪人だと報告したためである。しかし、男の寝顔には「より深い生の完全な静けさ」(the sheer stillness of the deeper life) があり、それを見た女の心は「生の繊細な炎の先」(the tip of a fine flame of living) が触れたように、深く動かされる。

太陽に照らされた、松に覆われた神殿には「原始的な新鮮さ」(the pristine newness) があり、目覚めた男は岩の裂け目に「小さな黄色と白の水仙」(the little yellow-and-white narcissus) を見つける。黄色と白はイシスの巫女の衣装の色であり、彼女は第二部のはじめで水仙にたとえられていた。つまり、この水仙はイシスの巫女を表し、この描写は彼女が原始的な生命の力に満ちあふ

れた環境の一部であり、それを男が見いだすことを暗示していると考えられる。

9 イシスの巫女と死んだ男

奴隷が目覚めた男を呼びにきて、死んだ男とイシスの巫女は会う。男は女に案内されてイシスの女神像を見て、たたえる。女は彼が失われたオシリスではないかと「魂の核心部分で」(in the quick of her soul) 感じ、とどまるように頼む。彼は「魂の中に太陽が昇ったかのように、花のように開いている」(open like a flower, as if a sun had risen in her soul) 女の顔を見て、腰のあたりにうずきを感じる。イシスの巫女はハスの花のように夜の太陽に反応するということなので、魂の中に昇った太陽とは、つまり死んだ男のことである。女が花が開くように、内部の自然の力にまかせて男に向かってきており、それに対して男の内部の死に絶えたはずの自然の力が、腰のあたり、つまり太陽神経叢のあたりに湧き起こるのである。

この新しい人間との触れ合いの兆しに、男は戸惑い、これを受け入れるかどうか迷う。彼は人間の日常的な生活とは別の生活のためによみがえったと考えているからである。しかし、男は、女が春のクロッカスのような「穏やかな人を癒す炎」(a tender flame of healing) であることを感じている。

男はこの後で海辺におり、岩から貝をとって「うまそうに」(with relish) 食べる。女の癒す力がすでに効果をあげて、食欲が回復しているのである。

女は神殿で瞑想にふけっている。彼女の生活も男同様、人間の日常的な生活から離れた孤独の中にある。彼女の瞑想はイシスの女神、オシリスを求めて一歩踏み出している姿の像の前で行われ、彼女は「女性的なものの流れ、オシリスを求めるイシスの衝動に」(to the woman-flow and to the urge of Isis in Search) 身をまかせる。

10 イシスの巫女の母

男は太陽に向かって進み、松の葉を踏んで松の下にたつ。男が女を見ると、女の頭上に夕日が輝いている。自然の生命の力が二人とともにあるのである。男は女が「どうしてか遠いところにある、柔らかい、物思いにふける雲のよう」(like a soft, musing cloud, somehow remote) であるのを見て心をうたれる。女は男にあなたはオシリスではないかとたずね、顔を赤らめる。男は、あなたが私をとらえている「死の隔て」(the death aloofness) から癒してくれたら、そうなるだろうと答える。二人は「西に沈む太陽のあたたかさと光の中」(in the warmth and glow of the western sun) で黙って座っている。こうした描写は

周囲の自然の力と二人の行動の結びつきをあらわすために、必ずと言っていいほどみられるので、以下の部分については繁雑さを避けるため、省略することにしたい。

夕日は浜辺の奴隷たちも照らし、「寛容にみちたパーン（牧神）」(the all-tolerant Pan) が見守っているとある。パーンが彼らの神であるべきだと書かれているが、これは死んだ男の考えとも作者の考えともとれる。

男の洞窟に食べ物と夜具を持ってこようとする女に対立するであろう存在として、ここで彼女の母が話題にのぼる。彼女は第1部の農夫と妻、マドレイン他3人の女などに相当するが、死んだ男は死によって母との絆すらも断ち切り、したがって母の支配力も及ばないところにいるのだが、イシスの巫女は俗世を捨てているが、財産の大半を母にゆだね、したがって物質的な面での母の支配力は及んでいるのである。母は「白髪頭（灰色の頭）の母」(the mather with grey head) と書かれている。これは直後に「黄色と白」の服を着た「金髪の」イシスの巫女のことが出ているので、意識的に色を対比させて書いていると考えられる。年を取って白髪になっているという意味だけでなく、ここで「灰色」というのは自然な欲望の流れをさえぎり、支配を及ぼそうとするというニュアンスがこめられている。その後でも母の歩き方は「ドスドスと重々しく歩く」(plodded with a stampingstride) というもので、娘の夢うつつの歩き方と違って「決然とした」(determined) ものだとある。

パーンに従うべき健康な肉体の奴隷たちは彼女の支配下で日々の労働に従事している。海から取った魚のはいった容れ物をもつたくましい老奴隷、浅いカゴに洗濯したリンネルを山積みにするたくましい女の奴隷、その他洗濯物や網やオールや帆などを運んでいる者たちがいる。死んだ男はこうした様子を眺めて、「こうしたものを偉大な日々の中に取り込み、小さな生を偉大な生の円の一部としない限り、すべては災いだ。」(Unless we encompass it in the greater day, and set the little life in the circle of the greater life, all is disaster.) と言う。つまり、彼らのしていることは灰色の母の支配下での奴隷労働であり、本当は彼らは自然の生命の力をあらわすパーンの下で、それぞれに流動する生の沸騰の一つとして生きるべきだということを言っていると思える。

11 再生の儀式

死んだ男とイシスの巫女は、夜の神殿で待ち合わせる。男は食べ物を食べ、ワインを飲み、イシスの巫女のことを考える。彼女に触れることは「太陽に触れるよう」(like touching the sun) なことである。「彼女の彼への穏やかな欲

望、太陽のような、とても柔らかく静かな欲望」(her tender desire for him, like sunshine, so soft and still) が何より最上のものである。彼は「外の世界への恐怖」(the fear of the outer world) に取りつかれてもいるが、「私たちを守る太陽の法」(a law of the sun which protects us) があると自らにいいきかせる。

男は神殿の闇の中で待ち、やがてイシスの巫女が明かりを灯してやってくる。女はまず女神像のところへ行き、何かの儀式を行う。このとき彼女は男の方を見ない。彼は「彼女を恍惚状態の中で一人のままにしておかねばならない。」(I must leave her alone in her rapture) と考える。彼女は自分と同じく孤独で、それでも男の自分とは違った存在である。その独自性を侵害することをひかえようと言っているのである。彼は自分と彼女との違いに驚嘆する。「私の死の勇気とはあまりに違う、柔らかい不思議な生の勇気はなんと美しいのだろう！」(How beautiful with a soft, strange courage, of life, so different from my courage of death!)

ここから男と女は、死と生の対として描写される。男は傷の痛みを感じ、女は男に死の影を認めて、こわくなる。男は「生の要求に直面し、しかも死の重荷を依然として背負っている」(faced by the demand of life, and burdened still by his death) ことに絶望的になる。彼の傷を負った手のひらに、彼女は軟膏を擦り込む。「不正と残酷の苦痛」(the agony of injustice and cruelty) が彼によみがえる。女は「引き裂かれたものは新たな肉となり、傷ついたものは新たな生命で満たされる。」(What was torn becomes a new flesh, what was a wound is full of fresh life) とつぶやきながら、彼の手のひらをこする。このようなつぶやきを聞いて、男は微笑して「彼女は私が何者であるか、決して知ったり理解したりしないだろう。とりわけ、私の中をかつて通っていった死を決して知ることはないだろう。」(She would never know or understand what he was. Especially she would never know the death that was gone before in him.) と考える。ここでの男と女の接触は、「理解」のためのものではないのである。

男 (死) − 女 (生) の対は、かつての男の行動における「愛の死体で私に使える」(serve me with the corpse of their love) ことの要求と「生きた愛」(live love)「肉体をともなう」(in the flesh) 愛との対につながる。男はかつて後者を理解しなかった。今や彼は「触れ合いの中にある、喜びに満ちた、柔らかい、あたたかい愛の現実」(the reality of the soft, warm love which is in touch, and which is full of delight) をさとるのである。そして今度は生と死の対の

延長に「彼女が触れること」(her touch)が「私のすべての言葉」(all my words)にまさると述べられる。

死の苦痛の記憶が繰り返し、より強くよみがえり、男は死を理解することのない女が自分からこの苦痛を取り去れるのかと疑う。しかし、やがてあたたかみが感じられ、男は「私は朝のようにあたたかくなるだろう。」(I shall be warm like the morning)「理解はいらない、新しさが必要なのだ。」(It doesn't need understanding. It needs newness.) と考える。男の中には、自然界の夜明けに当たる、彼の中を昇ってくる「新しい太陽」(a new sun) が近づいてくる。

このようにして死と生の対立は克服され、男は女に欲望を感じることができるようになる。ここでも人間の活動を自然界の生命の力と結び付ける比喩がふんだんに使われている。女の体は「柔らかく白い生の岩」(the soft white rock of life) であり、岩に日差しが照りつけるように、彼は「夜明けのように力強く、新鮮に」(powerful and new like dawn) 彼女にかがみこむ。女の服を脱がせると「彼女の白金色の乳房の白い輝き」(the white glow of her white-gold breasts) がある。彼女の体は、温かいバラの内奥部で、これらは言葉による祈りに対比されている。彼を見る目は花のようである。彼は自分の傷を太陽だと言う。

この後外に出た男は洞窟のところで水仙を見るが、以前「黄色と白」と書かれていたこの花は、ここでは「白金色」(white-and-gold) となっている。これはイシスの巫女の体の色であり、生まれ変わった男の目にはこう映ったということであろう。

12 別れ

冬の季節に起こった二人の接触は、自然界の季節の移り行きとともに、完全なものになっていく。スモモの花が散り、水仙の時期が過ぎ、アネモネの花が咲いて散り、畑の豆の匂いがするようになる。こうした変化は「宇宙の花が花びらを変えた」(the blossom of the universe changed its petals) と表現されている。死んだ男とイシスの巫女の接触も、春とともに充実し、秋とともに過ぎ去るという自然のリズムに従うものである。男は旅立つことに決め、その直接の原因は、女が身ごもり、それに伴う彼女の母親などとの所有をめぐる争いを避けるためであるが、同時にそれは自然のリズムにしたがうことでもあった。

旅立つ男は孤独だが、以前とは違いイシスの巫女との接触が生んだ「目に見えない太陽」(invisible suns)が彼とともにあると言う。男は再び季節がめぐるとともに戻ってくると女に言い、ある晩、彼をつかまえに来た奴隷の小船を奪

って旅に出発するのである。

以上でストーリーに沿った分析を終わる。次に、この話を全体的に眺めて象徴を整理してみよう。

＊　＊　＊　＊　＊

（1）孤独、欲望、自然の力…この話では、人間の欲望を宇宙的な自然のサイクルの中に位置づけている。つまり夜から朝へ、冬から春へというように生命力に充実のサイクルがあり、その中で木や花や動物が生の営みを行うのと人間の活動とは、基本的に同じものなのである。

このような力は、この話では細かいところでも表現されている。例えば生け贄の儀式を逃れたハトが松の木の上を螺旋を描いて飛び去って行くという場面が、第2部のはじめにある。このエピソードは上に述べたような自然の力の象徴的表現であって、単なる松の木、単なるハトとしての描写ではない。これは今まで論じてきたように、他の部分でも同様の描写を意識的に行っていることから明らかである。ロレンスが目指しているのは写実的なリアリティーではなく、象徴としてのリアリティーである。今のハトのエピソードに続いて少年と少女の無意識の衝動に突き動かされたかのような殴打と性交、それを死んだ男とイシスの巫女が太陽の光を浴びながら見ているといった幾重にも重なった出来事が描かれる。これは現実の模写という点でのリアリティーをもつかという点では偶然が重なり過ぎているが、表面のストーリーと必ずしも関係しない象徴的首尾一貫性の点で判断されるべきリアリティーをもっている。つまり、さまざまな自然力（太陽の光、風、波など）、自然の生き物（松の木、ハトなど）の織り成す網目と、人間の活動との神秘的な包含関係がロレンスの考えではリアルなのであり、語られている出来事はそれを効果的に伝えるための虚構なのである。

また、この話では、孤独ということが、しきりに取り上げられている。孤独は欲望の前提であるとされている。神殿で二人が触れ合うとき、はじめイシスの巫女は男を見ることなく自分の夢に没頭している。男はそれを尊重する。そのようにして女は見いだされたオシリスという自分の物語を、男は死の痛手から再びよみがえるという自分の物語を生きる。このエピソードはしたがって、二人のそれぞれにとって別々の意味を持つものなのである。お互いにとって相手は夢の中の登場人物のようなものである。そして、それぞれが魂の奥の、無自覚の衝動にうながされるようにして求めた相手である。イシスの巫女は、魂の核心によって直感的に男をオシリスに結びつけるし、男は女に触れられて、自分の中に太陽が昇るように感じる。それぞれ別々に自然の生命の力を内部に

感じるという形で欲望は成就するのである。

（2）拘束するものからの脱出…この話の主な登場人物、死んだ男とイシスの巫女と、人物ではないが雄鶏は、いずれも何かにしばりつけられている。物理的に拘束されているのが鶏の場合で、この話を鶏のエピソードから始めることで、ロレンスは作品のテーマをはっきりと示している。つまり鶏は縛られていても活力にあふれ、内部の生命の力の充実によってそれを引きちぎって自らの活動の場を求めて出て行くのである。

死んだ男をつなぎとめるものは、死による欲望の消滅である。周囲の世界との対比は、彼が自然のリズムから切り離されていることを強調している。吐き気と幻滅感はそこから生じている。

イシスの巫女は、失われたオシリスという状態、つまり内部の生命の力をときはなつ媒介となる相手を欠いているという状態にとどめられている。彼女の母の支配についても、あまりはっきりとした形ではないが、触れられている。

死んだ男は鶏を含む周囲の自然によって、死をも越える生の沸騰する力を感じ、かつての人間の間での生活を離れて、流動する自然の中にはいっていくことにする。人間の生活は自然のリズムから離れた小さく狭い意識に駆り立てられ、お互いを縛ろう、あるいは何か（特に金銭）を所有しようとしており、男は死によってそのくびきを脱した以上、元に戻ろうとは思わない。

これを詳しく描いている第1部の後半の農夫・その妻・マドレイン・母などを相手にしたエピソードは、ロレンスの考える人間社会の自我の支配のいくつかの典型的局面（金銭、恋愛、師弟、親子など）を効果的に示すための虚構であり、死と復活という神話的なモチーフも含めて、写実という意味でのリアリティーを求めたものではないと考えられる。死んで復活するとは、人間をしばっている、社会のさまざまな価値基準を捨て去るということ、拘束を脱するということである。

（3）オシリスの神話…この話ではキリスト教と異教の二つの神話が融合している。キリストの死と復活がこの作品で持つ意味は（2）で説明した。異教的なオシリスとイシスの神話も、この話では死と再生というニュアンスを持たされている。バラバラにされて捨てられたオシリスをイシスが集め、再び生き返るまで抱くというのである。これは豊饒神話の一種のようであり、やはり二人の結びつきを宇宙的な自然のサイクルの一部として位置づけているのであろう。

あるいは神殿の奴隷たちが夕陽に照らされる様子に、パーン（牧神）を重ねたりしており、ロレンスの考えからして当然ではあるが、全体に異教的な要素が強いと言える。

二　ロレンスの作品におけるこれらの位置付け

次に、これまでの分析によって得られた要素が、彼の他の作品にどのようにあらわれているか、そして彼についての研究や批評でどのように論じられているかみてみよう。

1　他の作品

まず彼の短編をみると、多くのものが同じ要素を同じようなやり方で扱っている。

例えば「馬商人の娘」(The Horse Dealer's Daughter)[2] では、メイベルという不器量で愛想のない娘と、その土地の若い医師との間の恋愛が同じようなやり方で描かれる。若い医師はくすんだ炭鉱の町で仕事に追われ、消耗している。これが彼を束縛するものである。同時に彼は「仕事にこがれていた」(he had a craving for it)、なぜなら「いわば労働者の生命の最奥の肉体の間を動きながら、彼らの家にいること」(to be in the homes of the working people, moving, as it were, through the innermost body of their life) が彼に刺激を与えてくれるからである。

そんなことを考えながら自然の中でぼんやりしたいるとき、彼は家族の商売の行き詰まりのために沼に身投げするメイベルを見つける。彼は気を失っているメイベルを家に運ぶが、家族は留守で、それでも暖炉に火は燃えている。彼は沼の水のせいで「土のにおいのする」(earthy-smelling) 服を脱がせ、布で体をふく。ここでも表面のストーリーと象徴的な意味が重ねられている。なぜなら、この部分は平凡な商人の娘のもつ内部の生命の力が表に出てくる場面で、空っぽの家に燃える炎は彼女の中の自分でも気づいていない生命の力をあらわしていると考えられ、「土のにおい」も自然の生命的な力と関連づけるために意図的に選ばれた言葉だと考えられるからである。体をふく行為は医者としての行為であると同時に肉体的な接触でもある。その後も肉体の接触が多く描かれるが、それは必ず内的な感覚の描写をともない、それが自我を越える何かに突き動かされるものであることが繰り返し述べられる。彼女は熱に浮かされたように(つまり自分が何をしているかの自覚があまりない状態で)、彼に抱きついていく。医者はおびえ、混乱し、同時に自分でも理由はわからないながらそこを離れられない。彼女の肩をさわると、それは「炎が手を焼くように」(A flame

---

2）引用は同じく Heinemann 版の12巻より。

seemed to burn the hand) 感じられる。彼の意志は衝動に負けまいとする。つまり医者としての職業的自覚にもとづく彼の意志は、内的な生命力と対立するものとして描かれている。結局彼は負け、彼女に笑いかけると、彼女の目から「ゆるやかな泉がわき出すように」(like some slow fountain coming up) 涙が流れる。(自然との類比。)彼は彼女の頭を抱き、離せないと思うが、彼の自我は知り合いがこれを知ったら笑うだろうという不安をいだく。彼は自然の力の現れとしての内的な認識と世俗的な考えとに分裂している。

二人が我に返り服を着ると、暖炉の炎は消えかけている。内部の力に駆り立てられて自我の配慮から解き放たれた時間（彼の時計は止まっていた）は終わったわけである。医者は仕事を思い出し、メイベルをおびえさせるひびきを含んだ声で、結婚したいと彼女に言う。これは内的な力にしたがっているのでなく、「責任」というような考えから出た言葉なのであろう。『死んだ男』の場合と違って、「馬商人の娘」では二人は自分たちをつなぎとめていたものに再びつながれて終わっている。

短編では他に「馬で去った女」「太陽」などが同様の傾向を示している。また中編の「狐」では、同性愛の女性二人の生活に一人の男が侵入し、女の一人と男とのかかわりが描かれ、それが彼女の狐に対する印象と重ねられる点が、『死んだ男』での雄鶏の場合とよくにている。ロレンスの多くの作品で動物が重要な役割を果たす（「セント・モール」のセント・モールという名の馬、『カンガルー』のカンガルーなど）が、これは例外なく自然の力を媒介するものとしての役割をもっており、したがって自分の中でそのような力を抑圧している人間に対しては悪魔的な恐るべきものに見えるのである。

短編の場合にはその短さのために、孤独の中で目覚める自然の生命の力への感覚と、それが通常の社会性から逸脱していくという要素を核に作品を構成することが可能だが、長編の場合にはそれだけでは全体がもたないせいか、人間をつなぎとめるものの側がより詳しく描かれている作品が多い。『チャタレイ夫人の恋人』のクリフォードの属する中産階級の窮屈さ、クリフォードの独善的、権威的なふるまいもそうだし、『虹』の男性の登場人物が必ず陥る内的葛藤、相手の女性との関係での支配欲からおこる葛藤を詳しく描いているのもそうである。両作品とも外部と内部の生命の力の重なり合いが重要な要素である点は『死んだ男』と共通だが、『死んだ男』で暗示的に示されていた「気違いじみた自我の主張」「情熱と環境と強制の奇妙な絡み合い」の部分が細かく書き込まれているのである。もっとも長編でも、例えば『羽のはえた蛇』のように、自然力の化身であるメキシコの神ケツァルコアトルが前面に出ている例もある。

異教の神話ということでは、今述べたケツァルコアトルなどもそうではであるが、どちらかと言えばエッセイを見た方がはっきりしている。『死んだ男』で少しだけ触れられているパーン（牧神）については、『不死鳥』の「アメリカのパーン」の中で論じているが、アメリカインディアンの自然崇拝をパーンと結びつけているように、さまざまな時と場所の神話に彼なりのつながりを見いだしていたようである。

2　研究・批評

次に今まで論じてきたいくつかの要素を理解するうえで参考になりそうな研究・批評をみてみよう。まず、孤独な状態で男が知る自然の生命的な力、その一部である内部の力という要素であるが、この考え方はヘルメス主義の影響を著しく受けているようである。ヘルメス主義は、キリスト教正統の神と人との分離、混沌や闇などのもつ生命的な力の否定、歴史を直線的に終末へ向かうとする見方などとは反対に、人間を神的な創造力をもつものと見なし、混沌、闇、怪物などのシンボルを生命の源と考え、歴史を周期的に新しく生まれ変わる永遠回帰ととらえる。ヘルメス主義的見方によると人間は神から離れ、回帰のサイクルの外に出るが、それはキリスト教の原罪による楽園追放のような罪ではなく、その先で知の限界を超えた「美しい自然の姿をした神の新しい姿」を見いだすという。キリスト教正統が天上界と人間の住む世界を別の次元と考え、無からの創造を考えるのに対し、ヘルメス主義的見方では創造は既にあるものとしての混沌から生じたもので、したがって「『全宇宙は物質的なものである…全ては生き物である…』」という。『死んだ男』で男が見た自然界の沸き立つ生命は、ヘルメス主義的な絶対者の面影をもつものであると思われる。またヘルメス神は男と女の性をもち、懐胎し全てのものをはらむことがその本質である。世界はその子宮であり、そこで善と悪、秩序と混沌、光と闇などの対立物の統一の原理に従って、水・火・空気・湿気が愛と欲望の力によって結びつき、新しいものが生まれるのである。死んだ男とイシスの巫女の結びつきと彼女の懐胎が自然のさまざまなシンボルと重ねて描かれるのは、こうしたヘルメス主義的世界観を反映していると言えるだろう。[3)]

ロレンス研究の歴史では、この自然の生命的な力という点をめぐって、初期

3）*Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*. Philip P. Wiener, ed.. 5vols. (1968. NY: Charles Scribner's Sons, 1973.) の "Hermeticism" (vol.2, pp.431-434) を参照した。文中の引用はその一部を訳したものである。

の強力な擁護者であったF．R．リーヴィスの「生命」への注目から始まり、後にはノースロップ・フライのロレンスの有機的宇宙観をロマン主義者の後継と見るなど、多くの研究がおこなわれてきた。イーヴリン・J・ハインツは『虹』をユダヤ・キリスト教的伝統の歴史主義に対立するアルカイックな社会の周期的宇宙観があらわれている好例であることをミルチャ・エリアーデの『永遠回帰の神話』を参照しながら論じているが、これもロレンスをヘルメス主義的伝統の一環としてとらえようとするものであろう。[4)]

ただ問題なのは、こうした見方をすると今度はロレンスの「孤独」の特質がはっきりしなくなることである。この見方だと、ロレンスはブレークやワーズワースなどとひとくくりになってしまう。しかし、ロレンスの登場人物は相手の女性に対しても自然に対しても、それが自分とは異質であるという意識を強くもっている。先に述べたように、孤独が欲望の前提になっているのである。それは自然や女性との間に交感が成立した後も基本的には変わらず残る。これは例えばワーズワースにとっての孤独のもつロマンティックなニュアンスからはかなり遠いものである。

次に内部の生命の力の発現を妨げるものについてである。これはこれまでフロイト的、マルクス主義的の二つの軸から、おおくの研究がなされてきた。フロイト的に見ると、特に『息子と恋人』にみられる母との関係（母への「固着」）が問題とされる。これはロレンス自身が自らについてもっていた考えでもある。ただし『無意識の幻想』にみられるように、彼はこれを個人的な問題としてではなく、現代社会に一般にみられる問題に広げて考えた。『死んだ男』ではイシスの巫女と母とのエピソードにその片鱗がのぞいている。

マルクス主義的に見ると、階級の問題がクローズアップされる。労働者の生活を縛る金の問題である。同時に労働者の情熱的感情表現をもつ生活から見た中産階級の冷たさ、活気のなさという問題でもある。

しかし、これらの研究の方向は大事なものではあるが、『死んだ男』に見られる束縛を理解するためには不十分であると思える。そこで最後にファニー＆ジル・ドゥルーズの論（ロレンスの『アポカリプス』仏訳の序文）[5)]を参考にして

4）Evelyn J. Hinz, "The Paradoxical Fall: Eternal Recurrence in *The Rainbow*" in Harold Bloom ed., *D.H.Lawrence's The Rainbow* (Modern Critical Interpretations, NY: Chelsea House Publishers, 1988) pp.81-96.

5）ファニー＆ジル・ドゥルーズ「ニーチェと聖パウロ、ロレンスとパトモスのヨハネ」鈴木雅大訳、『総特集ドゥルーズ＝ガタリ』（現代思想臨時増刊号、東京、青土社、一九八四年）299-315頁所収。

ロレンスが考えた束縛についてまとめてみようと思う。

『アポカリプス』でロレンスは愛の宗教を作ったキリスト本人とヨハネの黙示録を別のものだと言っている。キリストは「個の心」を陶冶することを教え、世間的な事は「カエサルのものはカエサルへ」ということで他に任せた。ヨハネの黙示録は、キリストが放置した世俗的な権力を求める気持ちを最終的な審判という形で回収する。それは裁きのシステムであり、「私たちの内なるまた外なる＜権力＞」を求めようとするものある。そしてそれは人間の「個の心」を縛るものである。なぜなら審判のシステムは「個の心」を作り出すさまざまな関係を、固定したものにしてしまうからである。万物の流動の中で「個の心」を保っていた異教的世界像（ヘルメス主義もその一つ）が、善と悪の区別のシステムに固定されて行く過程をロレンスは『アポカリプス』の中であとづけている。例えば地獄は異教的世界像では元素の流動によって生じた場所で全体の循環の中に位置付けられていたのが、黙示録では不変の排他的二項（善悪）の一方として固定されている。

このように異教的コスモスに見られるような生命的な力を妨げるものが、キリストの中にもあったとロレンスは言う。キリストは愛の宗教を唱え、それは権力を求めること、裁くことなどの対極にあるのは明らかだ。しかしキリストの愛のうちには「受け取ることなく与えよう」とする姿勢があり、それは自己愛的な自殺願望につながるもので、ヨハネの黙示録の他を滅ぼすことによって自分だけは永遠に生き残ろうとする狂熱と表裏一体のものである。『死んだ男』でロレンスが描いたキリストの行動はこの『アポカリプス』の議論に沿っている。男（キリスト）はかつての自分の活動が、ここでのドゥルーズの表現で言うと、連結しあっている世界を与えたり取ったりする主客の目的関係に再構成し、「自我」の中に閉じこめてしまうものであることを自覚した。それで今までのやり方を変え、ただ「与える」のを拒み、孤独を保ち、「現象の沸騰」が自分の中を、あるいはより正確に言えば自分と周囲との間を、通っていけるように生きようとするのである。